

農学生命科学研究科附属多摩農場散歩



大杉 立

大学院農学生命科学研究科
附属農場長 教授

多

摩農場は西武新宿線田無駅から北へゆっくり歩いて十五分のところにある。東西約三〇〇m、南北約八五〇mの東京ドームほぼ五個分の面積である。正門は所沢街道に面しており、入ると本館まで三〇〇m近い一本道が続いている。

左側には桜の大木が枝を広げて連なり、木陰の芝生では毎日のように近所の保育園児たちがピクニックを楽しんでいる。もちろん花見の頃は大混雑である(1)。平日は一般に開放しており、幼児連れや写生をするお年寄り達の姿がよく見かけられる。一般開放以外の地域住民との交流としてはオープンファームの人气が高い。これまで餅つきやトウモロコシ迷路遊びなどを行ったが、昨年はコンニャク作り小学生と保護者が挑戦して、自家製コンニャクのうまさを満喫した(2)。

正門を入つてすぐ右には作物見本園がある。コムギ、ダイズ、アワ(3)、ワタ、ゴマ、コウゾなど何でもあり、一回りすると作物の物知り博士になることができる。

しばらく進むと本館に近い桜並木の奥に多目的実験実習園場が見えてくる。ここでは農学部学生に対する実習が行われる。また、学生の自主管理による作物栽培や最近では教育学部附属中等教育学校の総合学習としての作物栽培も行われている。実習は附属農場の三つの役割(研究、教育、社会貢献)の重要な柱の一つで、期間の違いはあるが三年生の半数以上が作物の栽培を学習する。長い実習では一年間に渡り、毎週一日実習を行って種まきから収穫、更に市場に出荷するところまで、作物の一生をつぶさに体験する(4)。

作物見本園を過ぎた右側にも広い畑が広がっており、そこでは一九八〇年以降三種類の作物を計画的に栽培して土壌の肥沃化の過程を追いかけるという息の長い研究を行っている。

そして本館に到着(5)。一九八一年に現在の建物になったが、旧本館は木造二階建て、床は板張り

(3) 作物見本園のアワ

(2) コンニャク作りを楽しむ小学生たち

(1) 花見時の桜並木



(6) 多摩農場旧本館

(5) 多摩農場本館

(4) 学生実習 (トマトの栽培管理)

の風情のある建物であった(6)。一昨年、附属農場(東京都西東京市の多摩農場と神奈川県二宮町の二宮果樹園)は開設二五周年を迎えた。農学部の前進である農学校が一八七八年(明治十二年)に開設され、駒場野(現在の教養学部のある東京都目黒区)に学内農場として設置されたのが始まりである(7)。その後変遷を経て、一九二六年(大正八年)に果樹園が神奈川県二宮町へ、一九三五年(昭和十年)には農場本体が西東京市に移転して現在に至っている。本館には歴史を忍ばせるお宝も多く所蔵されている。例えば、獨逸農事圖解(8)は一八七三年(明治六年)に開催されたオーストリア・ウィーン万国博覧会で収集した知識をもとに制作され、当時の駒場農学校におけるドイツ式農法の教科書として利用されていたようである。

本館の右を向くといつ倒れてもおかしくないような木造二階建ての大きな建物が目に入る(9)。学生の宿泊実習用の宿舎で、いまなお現役である。危ないので窓の手すりには近づかないように、というのが宿泊実習第一日目早々の最重要注意事項である。本館左にはフェンスで囲われた遺伝子組み換え作物用の温室と隔離圃場がある。本館をまわると農機具庫。ここも古い。昭和十年の移転時期に立てられた倉庫が残っており、懐かしさと居心地の良さを感じることができる。これらの建物と学生宿舎は昭和の時代設定の映画口ケに何度か使われたことがある。

本館右側の北に向かうメイン道路を進むとメロンなどを作る温室群が見え、その先の右側は野菜、トウモロコシ、ソバなどを栽培する畑(10)、左側は果樹園。更に進

むと左側に和牛の畜舎と放牧場がある。ひと昔前まで乳牛も飼育されており、東大牛乳は安くて美味しいと評判だった(11)。右側には水田が広がっている(12)。これらの圃場を使って、化学肥料や農薬などの補助エネルギーにあまり頼らずに持続的に生産できるシステムをつくるための研究や水不足等のストレスに対する作物の反応を明らかにする研究などを行っている。

畜舎や放牧場の周りはポプラ並木になっており(13)、一般開放の時間帯には市民の写生スポットになっている。また、この辺りに寝転がると、都会では失われてしまった空の大きさを感じながら昼寝をすることもできる。

寝転がって、農場の今後のことを少し思い浮かべてみた。

一昨年、二宮果樹園も含めた附属農場が千葉市花見川区の検見川運動場へ移転することが決まった。しかし、移転の時期は未定である。運動場の大部分が柏エキャンパスに移る計画は進んでいるが、その後畑や水田の整備が始まり、附属農場が完全に移転して研究や実習ができるようになるのは五〜七年先と予想される。検見川への移転によって長い間西東京市と二宮町に分かれていた附属農場が再び一緒になり、他の組織も加わってフィールド農学センター(仮称)として新たな出発をすることになる。時代のニーズに対応して新農場がどのような役割を果たしていくべきか、侃々諤々の議論が進んでいる。

また、移転後の多摩農場をどうするかについても白紙の状態であるが、市民の貴重な憩いの場として愛されており、東大農場のみどりを残す市民の会という組織も出来ている。農場としても様々な意見を聞いて、できるだけ今の貴重なみどりを維持できるように方向を探っていきたい。

子供たちの帰宅を促す夕焼け子焼けの音楽が聞こえてきたので、都会の中の一服の清涼剤としての農場散歩もこのあたりで終わらせることにしよう。

(9) 学生宿舎冬景色



(8) 獨逸農事圖解 第14田圃耕作法



(7) 駒場農学校講堂と植物園 (明治15年頃)



(13) ホプラ並木とタワーサイロ

(12) 牛の放牧 (昭和30年頃)

(11) 水田のイネ刈り風景

(10) 研究用ソバ栽培